



Title	カタロニア語の起源とそのロマニアにおける位置について
Author(s)	伊藤, 太吾
Citation	Estudios Hispánicos. 1981, 7, p. 73-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93602
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カタロニア語の起源とそのロマニアに おける位置について

伊 藤 太 吾

“カタロニア語のロマニアにおける位置”という時、現在の時点でどのロマンス語に最も類似しているかという事が主として問題になる。そして、その類似しているロマンス語というのは、プロヴァンス語とカスティリア語の事である。ロマニアにおける位置という時あと一つ問題になるのは当然の事乍ら、政治的・文化的により強力な言語の一分岐にすぎないのか即ち独立した言語では決してないのかという事である。「方言」・「地方語」という名称が政治的・文化的優位を暗々裡に含んだ表現である事は確かで、例えば gallego は一般にスペイン語の一方言と言われてはいるが決して、castellano から派生したものではない事は明らかである。しかし乍ら、catalán については従来上に言及した分岐即ち所属の問題が断えない。そこで筆者はこの度、従来の諸説を検当し、“起源”と“現在の時点での位置づけ”は果して同次元で扱って良い問題なのか、その“起源”はどこにあるのか、そして、できるならば、“現在のロマニアにおける位置の明確化”の三点について考えてみたい。

さて、カタロニア語の“起源”という時、筆者も Moll (注1)の言う如くに、“los factores históricos que determinaron la formación de esta lengua”と理解したい。すると formación という概念の明確化に問題が移る。考え方によっては formación = latinización (の年代と様式)とも取れるが、別の考え方によれば、言語の全き姿はあり得ない故に今日なお formación の過程にあるとも言える。今は後者の如く広義に考えておこう。

筆者が“起源”の問題を扱うのはあくまでも“現在のロマニアにおけるカタロニア語の位置”に関してであるので、当然の事乍ら、隣接するカスティリア地方とプロヴァンス地方との歴史的比較が必要となる。今は主として言語史に関係する事項をひろい書きにしてみよう。

a) B.C. 218年ラテン語が伝播され、以降バスク地方を除いた広範な地域でラテン語が運用される。この際明確にしておく必要があるのは、ラテン語化は一地域又は極く少数の地域で成されたのではなかったと言う事と当時のラテン語の何方言がイベリア半島のどの地方にもたらされたかが正確には分らないという事である。Tarraconensis のラテン語が進取的で Baetica のラテン語は守旧的であったと言うのは、今日のポルトガル語・スペイン語・カタロニア語から類推して言っているのである。しかし、南 Gallia におけるラテン語化より約100年程、北 Gallia より150年程早いのは明白である。だから、語彙面だけを考えると、oír, hermoso, mesa, comer, feo, heder, enfermo, ir, malo, madera, mujer, preguntar, querer, trigo, barrer, pedir, ciego, coger, cueva etc. のように仏語などには見られないイベリア半島独特の語彙が存在するわけである。(注2)

このラテン語化の項目を見た場合、カタロニア語とプロヴァンス語との類似性は認められない。

b) 西ローマ帝国の消滅するV世紀に半島は西ゴート族の侵入を受けるが、文化的に程度の低いゴート族の俗ラテン語に及ぼした影響は少い。しかし、しいてプロヴァンス語とカタロニア語との関連で言うならば、西ゴート時代の初期の段階でプロヴァンス地方とカタロニア地方を結ぶ領土的統一は存在したが、それが為に言語的統一が同一範囲内に生れたとは考えられていない。

c) 711年にアラブ人が半島に到来する。カスティリア語は当時は存在しないが、非カタロニア語域に限って今日の方言学的名称で当時の半島を色分けしてみると、gallego・asturiano・castellano の極一部以外はアラビア語の大きな影響を受けたのに対し、プロヴァンス語がアラビア語の直接影響下になかったと同様、今日の少くとも東カタロニア語域はアラビア語の影響を受ける事は殆んど無かったと言えよう。

d) VIII世紀後半フランク族がセプティマニアを再征服し、カタロニアに侵入する。その時代、宗教上カタロニアはナルボンヌの大司教区に編入されていた。

e) 中世初期のプロヴァンス地方の吟遊詩人達の影響でカタロニア地方でもプロヴァンス語が少くとも知的レベルの高い人達の間で用いられていた。

歴史的事実については後で少し補足することにして、今は概略を示すに限った。

さて、カタロニア地方に伝播した俗ラテン語と半島の他の地方にもたらされた俗ラテン語にどの程度の差異があったかを知る事は極めて困難である。そのようなわけで、年代的に初出文献に近い文献や、場合によっては、より新しい文献に当って類推せざるを得ない。しかし、新しい文献にしか見当たらない言語現象は、たとえその単語が俗ラテン語に由来するものであるとは言え、特殊音韻変化・類推による変異形などの複雑な要素の合体である可能性がある。

音韻面における半島諸方言の類似差異、特にカタロニア語の特質は、“いわゆる *proto-ibero-romance* は本当に存在したか” (注3) で明瞭なので、今回は形態面・統辞面などでカタロニア語の特異性が果して存在するか否かを見てみよう。(注4)

a) 性がカスティリャ語とかカタロニア語と異なるもの。

cat. (m.)	cast. (f.)	fr.	
l'avantatge	la ventaja	l'avantage	(m.)
el corrent	la corriente	le courant	(m.)
el costum	la costumbre	la coutume	(f.)
l'escafandre	la escafandra	le scaphandre	(m.)
el fel	la hiel	le fiel	(m.)
el front	la frente	le front	(m.)
el llegum	la legumbre	le légume	(m.)
el pendent	la pendiente	le penchant	(m.)
el senyal	la señal	le signal	(m.)

b) 反対に、カスティリャ語において男性であるがカタロニア語では女性、そして仏語でも主として女性のもの(注5)

cat. (f.)	cast. (m.)	fr.	
l'anàlisi	el análisis	l'analyse	(f.)
la calor	el calor	la chaleur	(f.)
la dent	el diente	la dent	(f.)
la fi	el fin	la fin	(f.)
l'olor	el olor	l'odeur	(f.)

la pols	el polvo	la poussière	(f.)
les pólvores	los polvos	la poudre	(f.)
la resplendor	el resplendor	le resplendissement	(m.)
la suor	el sudor	la sueur	(f.)
la vall	el valle	la vallée	(f.)

c) 複数形成法に関しては、西ロマニアの特徴である -s を添加するという点において、仏語・プロヴァンス語・カタロニア語・カスティリア語の四者に差異は無い。

d) 中性代名詞 *ho* はカスティリア語の *lo* に対応するとは言うものの、その形はプロヴァンス語にも無く、カタロニア語をして特異なものにしている。又、副詞的代名詞 *hi* と *en* の存在は、現代語のみを考えて見ると、仏語や伊語とのみ類似点を有すようであるが、中世カスティリア語にもそれぞれ、*y* (< IBI)・*ende* (< INDE) という副詞的代名詞は存在するので、この項目に関してはカタロニア語のみが特異とは言えない。

e) 所有形容詞については、まず古プロヴァンス語には主格と対格の区別がある点が大きく異なる。その次に、音韻形態的な差異は別にしても、カタロニア語が三人称の所有形容詞として *ILLORUM* に由来する *llur* を保存しているのは、プロヴァンス語を飛び越えて仏語と一致している面白い現象である。現代カタロニア語では、*un meu llibre*, *aquest meu llibre*, *el meu llibre* など、現代カスティリア語では言わない表現を使うが、実は中世カスティリア語にも上の三通りの表現は存在していた。しかし、古プロヴァンス語では定冠詞なしで使われるのが一般であった点が異なる。

f) ラテン語の完了形 *CANTAVI* は殆んどのロマンス語では *HABEO CANTATUM* に取って代られ、古カタロニア語では *cantí* が行われていたとは言うものの、現代カタロニア語では *vaig cantar* が一般的で、全ロマニアにおいて極めて特異的な存在である。(注6)

以上簡単ではあるが6項目について、カスティリア語・カタロニア語・プロヴァンス語・仏語の比較を試みた。その結果、カタロニア語が著しくカスティリア語に類似しているとかプロヴァンス語に近似しているとかのどちらか一方へのいわゆる“近親性”は別段認められないと言える。拙論、“いわゆる *proto-ibero-romance* は本当に存在したか”では、音韻面においてカタロニア語は特異で独立した言語であるという意味の事を述べたが、

形態面・統辞面でも同じ結論であると言えよう。

あと1つ残る問題点は、多分語彙の面であろう。これは極めて複雑な要素を含むので、慎重に考えてみよう。まず、カタロニア語がプロヴァンス語もしくは仏・伊語に類似している事を立証する目的で書かれた論文が2片あるので、それらを紹介・検当してみよう。

まずはじめに Colón: El léxico catalán en la Romania (注7) の説を見よう。Colón は Jakob Gud が Problèmes de géographie linguistique romane (注8) で取り扱われた24ケのカタロニア語の単語を、伊語・仏語・西語・葡語更にオック語と比較しているのであるが、それらを筆者が配列を変えて次に示す。

	port.	esp.	cat.	occ.	fr.	it.
1	primo	primo	cosí	cosin	cousin	cugino
2	irmão	hermano	gemà frare	fraire	frère	fratello
3	sobrinho	sobrino	nebot	nebot	neveu	nipote
4	verão	verano estío	estiu	estiu	été	state
5	tarde	tarde	vespre	ser, sera vèspre, vesprada	soir	sera
6	manhã	mañana	matí	matin	matin	mattino
7	sartã	sartén	paella	sartan padèla	poêle	padella
8	cama	cama	llit	lièt lièch	lit	letto
9	ave pássaro	ave pájaro	ocell	aucèl ausèl	oiseau	ucello
10	cão	perro	gos	can, canh gos	chien	cane
11	ameixa	ciruela	pruma	pruna	prune	prugna
12	manteiga	manteca	mantega	burre	beurre	burro
13	pedaço	pedazo	tros	tros, pièça pedaç, petaç	pièce	pezzo
14	pardo	pardo	gris	gris	gris	grigio

15	quente	caliente	calent	caud	chaud	caldo
16	demais	demás	massa	tròp	trop	troppo
17	tomar	tomar	prendre	prene prendre	prendre	prendere
18	querer	querer	voler	voler	vouloir	volere
19	rezar	rezar	pregar	pregar	prier	pregare
20	perguntar	preguntar	preguntar	demandar	demander	domandare
21	buscar	buscar	buscar	cercar	chercher	cercare
22	chegar	llegar	arribar	arribar	arriver	arrivare
23	falar	hablar	parlar	parlar	parler	parlare
24	comer	comer	menjar	manjar	manger	mangiare

上の表を見ると24ケのカタロニア語の単語のうち15ケが明らかに仏語や伊語と同じ単語を用いている。そして、葡・西語とも仏・伊語とも全く異なる単語を使うのは4例であり、あとの5例が葡・西語と同語源の単語という割合である。これらの24ケの単語がなぜ選ばれたかは不明であるが、当然の事乍らサンプル数が増加するに従って上記の比率が変わる可能性がある事は予測しなければならないし、又時代が変わるに従って用いられた語彙に変動があるのは当然である。そこで、Colón (注9)に従い、時代の変化に呼応して異なる単語が用いられたか否かを見よう。

“兄弟”の意味の *germá · germana* に対して、仏・伊語と同語源の *fratre · sor* が中世を通じて同じ程度の頻度で使われていたであろうと推測される。

現代カスティリア語では“夏”は *verano* であるが (注10)、古くはカタロニア語と同じく *estío* と言っていた。

“夕方”に当るカタロニア語は、伊・仏語の *sera · soir* でも、葡・西語の *tarde* でもなく、*vespre* である。(注11)

“ベッド”を表すカスティリア語は *cama* だが、古くはカタロニア語同様 *lecho* とも言われていた。

現代カスティリア語の“犬” *perro* は Corominas (注12)によれば、犬を呼ぶ時の人間の擬声語であるが、中世カスティリア語では *can* とも言っていたし、又カタロニア語にも *ca* という形がある。

“バター”を表す現代カタロニア語は半島系の *mantega* であるが、かつ

ては伊・仏系の *burri* (<BUTYRUM) もあった。

“あつい” については、現代カタロニア語は *calent* であるが、これは多分にカスティリア語の影響の結果である。中世カタロニア語では XV 世紀まで伊・仏語と同じく *cald* と言われていた。

この様に、いろいろな要素が入り乱れていて、カタロニア語の語彙面は複雑な様相を呈している。Colón の調査によると、24 サンプルのうち 70.8 % に当る 17 例がガリア・ロマンス語的であり、37.5% に当る 9 例がイベリア・ロマンス的であるという結果になる。たとえサンプル数が異ってもこれと類似した数値が得られるであろう事は Colón の指摘するところである。^(注13)

そして、Colón は、カタロニア語は地理的にはイベリア・ロマンス系である事は認めつつも、語彙全体を比較した場合、前述の如く、ガリア・ロマンス語的であるとの結論に達している。更に、カタロニア語がイベリア・ロマンス語とガリア・ロマンス語の中間的言語即ち “*lengua puente*” であるという意見に反対している。その理由は、例えば *castellano* は *aragonés* と *leonés* の *lengua puente* とは言わないし、又 *aragonés* を *catalán* と *castellano* の *lengua puente* と言わないのと同じだとしている。^(注14)

次に、G. Rohlfs : *Diferenciación léxica de las lenguas románicas* の研究を見よう。著者によると、^(注15) カタロニア語の帰属がガロロマニアであるという説をとえたのは、Diez・Meyer-Lübke・Bourciez・Griera などであり、イベロロマニア帰属説をとえたのは、Ramón Menéndez Pidal・Amado Alonso・Fritz Krüger・Harri Meier などであるが、彼自身の作成した語彙項目表を見る事によって帰属が明瞭になるとして、考察の対象にした 49 語のうちカスティリア語・カタロニア語・プロヴァンス語の 3 言語に共通した単語を除けて次の如き語彙表を示している。

esp.	cat.	prov.
1 manzana	poma	pouma
2 tío	oncle	ouuncle
3 hígado	fetge	fege
4 pierna	cama	camba
5 hervir	bullir	bouli
6 quemar	cremar	cremà
7 nada	res	res (ren)

8	domingo	diumengue	dimenche
9	viernes	divendres	divendre
10	vamos (imos)	anam	anam
11	mañana	demá	deman
12	llorar	plorar	plourà
13	ciego	cego, ciego	avugle
14	comer	menjar	manjàr, minjà
15	llegar	arribar	arribà
16	sanar	gorir	gari
17	uva	rahim	rasin
18	rogar	pregar	pregá
19	hombro	espatlla	espala
20	hallar	trobar	trobà
21	becerro	vedell	vedèu
22	cordero	anyell	agnèu
23	queso	formatge	froumage
24	cabeza	cap	cap
25	cuna	bres, bressol	bres, brassòu
26	albañil	paleta	massoun
27	cabrón	boch	bouc
28	sien	pols	pous
29	zorra	guilla, guinèu rabosa	renard
30	cuchara	culler (a)	cuié cuiera
31	hembra	femella	femela
32	mujer	dona	fema
33	querer	estimar	amà

これらの33ケのカタロニア語の単語のうち28ケの単語が明らかにプロヴァンス語との絶対的類似を示している。即ち57%の単語がガロロマニアに帰属し、わずか4%がイベロロマニア的であり、6%がカタロニア語独特の語彙という事になるので、カタロニア語は明らかにプロヴァンス語に従属 (dépendence) していると言い切っている。そして弟子の Heinrich

Bihler の研究を紹介しているが、それによると、XIII世紀の時点ではカスティリア語・カタロニア語・プロヴァンス語の3言語に共通する要素は35%にのぼり、カタロニア語とプロヴァンス語と一致する要素は45%で、カスティリア語と接触を保った単語は10%に達していたと言う。XIV世紀以降の数世紀間はカスティリア語的要素が強化されて30%に達し、カタロニア語独特の語彙は22%、プロヴァンス語と共通した要素は35%で、3言語に共通した要素はわずか10%に減少すると言う。

では、これらの異なる3時代別の百分率を筆者が一覧表にしてみよう。そして、表の分析を試みてみよう。

言語名 世紀	3言語 共通	カタロニア 語独特	cast. cat. 共通	prov. cat. 共通	その他
XIII	35%	10%	10%	45%	僅少
XIV以降 数世紀	10%	22%	30%	35%	3%
現代	33%以下	6%	4%	57%	僅少

この表を見て気付く事は、まず第一にXIV世紀以降のカスティリア地方の政治的・文化的優位性を反映して、カスティリア語とカタロニア語の共通要素がいちじるしく増加し、反対にその分だけプロヴァンス語との共通要素が減少しているという事である。次に、カタロニア語独特の要素の数字が極端に減っているという事は、独自の語彙を形成・運用するにはもはや時代的に遅すぎるという事と世界的に見た場合当然の事乍ら文化的指導力を有していないという事を物語っているし、更にカタロニア語とカスティリア語との共通要素が現代語で少いという事は、政治的・文化的な *separatismo* をよく物語っている数字である。

ところで、歴史的に見た場合、使用された語彙が変化して来ているのであるから、それなりの理由があるはずである。Rohlf's によれば (注16) 一般的に言って、

- i) sustitución de voces desgastadas por expresiones vigorosas (tests, manducare)
- ii) influencia de un refinamiento social (ficatum, cochleare, thius)
- iii) nuevos motivos culturales (dominica, beau-père, fromage)
- iv) tendencia a una mayor claridad (nulla res, nata res)

- v) exiguo volumen de la palabra (eo, fleo)
- vi) fenómenos semánticos (salire, femina)
- vii) acción del sustrato prerromano (cassanus, becerro, zorra, carvalho, berceau)
- viii) préstamo de otras lenguas (guérir, guerre, maçon, albañil, alfayate)
- ix) cambios léxicos inter-románicos debidos a la supremacía cultural de una lengua (mangiare, guarire, pregare, trovare etc.)
- x) convergencia fonética (vivere ~ bibere, vivere ~ videre, vivere ~ venire, cambia ~ cama etc.)
- xi) tendencia a las formaciones afectivas (vitellus, agnellus etc.)
- xii) influjo de ideas supersticiosas (renard, raposa, guinèu)

などの理由が挙げられると言うが、どういう意味的傾向の語彙がしかじかの変化をするというような音韻変化の如き法則を立てるわけにはいかない。だから、言語地理学が得た結論と同じく、“cada palabra tiene su propia historia (各々の単語には独自の歴史がある)”と言わざるを得ない。

しかし、もう少し詳しくカタロニア語の語彙の歴史的变化の原因を知ることができないだろうか、前半に見た歴史的事実の概観を補う意味もかねて、Sanchis Guarnier: Factores históricos de los dialectos catalanes (注17) によりいろいろな説を見てみよう。

Saroihandy と Schädel の説:

カタロニア地方と後に呼ばれるようになる地域に居住していたキリスト教徒の大部分はⅧ世紀のサラセン人の侵入からのがれ、南セプティマニアに定住した為に今日の如き言語上の境界ができた。

Morf の説:

Rosellón のカタロニア語はピレネー以西のカタロニア人によってもたらされたものである事に異存はない。しかし、Saroihandy や Schädel の言う如くサラセン人の侵入からのがれる為にピレネーを起えたカタロニア人がもたらしたものではなく、カロリング帝国の Marca Hispánica の存在と、XⅦ世紀中葉まで続くそのバルセローナ伯爵領の一部としての存続とによるとしている。そして、ピピンが759年にセプティマニアを再征服した時に多くのカタロニア人が Rosellón・Narbona・Carcasona・Beziers に流入した。最初の重大な移民の波は778年にシャルルマーニュがサラゴサに

向けて企てたかの有名な遠征の失敗により、フランク族と同盟的關係にあったカタロニア人はサラセン人の反撃に合った為に起ったものであった。

このような Saroihandy・Schädel・Morf などの説を受けて、Sanchis Guarner は (注18),

La lengua catalana es hispánica, pues es autóctona---deriva del latín vulgar del Nordeste de la Tarraconense---; pero con ese vínculo transpirenaico carolingio que repetía una situación análoga y más prolongada de la época prerromana, cabe relacionar, seguramente, las concomitancias entre el catalán y la lengua de occ. ..

と言っている。これは Colón や Rohlf s による語彙の比較の結果とは何らくいちがわない。

Juan Corominas の説:

En la Edad Media la frontera lingüística catalano-occitana no presentaba los contrastes tan radicales como actualmente, sino que en aquel tiempo el Rosellón formaba una zona de transición suave, si bien ya era entonces allí la lengua netamente catalana en su conjunto.

カタロニア人であり綿密な実証主義者として知られる Corominas でさえ、中世におけるカタロニアとオキタニアの緊密な政治・文化・言語的關係を否定していない。

Amado Alonso の説: (注19)

この論文は、Antonio Griera: Afro-romànic o bero-romànic? (注20) に反論する目的で書かれたものである。Griera の論文は、V 世紀の時点での全ロマニアにおける語彙の分布を分析して、カタロニア語がガリア・ロマンス語的である事を証明しようとしたものであった。そして、Griera は46ケのラテン語の単語を選び、

«Aquest nucli important de vocabulari és característic de les terres romàniques del sud, i assenyala, en els sigles V, VI i VIII, una gran diferenciació lèxica entre Romania, Itàlia del Sud, Africa del nord i Espanya, d'una banda, i les dues Gàl·lies i Espanya Oriental, de l'altra.»

という結論に達している。

しかし、A. Alonso は Griera の結果に対し、Griera の考察の対象となった46ケの単語のうち27ケの単語がカタロニア語にもカスティリア語に

も共存していて、3ケの単語がいずれの言語にも存在していないとして異議をとなえている。又、

- a) Cuando el Sr. G. ha tratado de probar la relación de dos lenguas por coincidencias léxicas no ha visto obstáculo en que la base común suponga sendas variantes fonéticas.
- b) Cuando el Sr. G. obra bajo su preocupación agrupadora, atribuye a las formas subfijadas o a los resultados de un cruce la misma fuerza de significación que a la base primitiva.
- c) El Sr. G. no ha considerado obstáculo para relacionar dos idiomas el que los resultados de la base común tengan en ellos significados diferentes.
- d) El hecho de aparecer una base latina, bien libre, bien en composición, no le merma eficacia agrupadora.

などの4つの理由を挙げて Griera の方法論的失敗を指摘している。そして、Amado Alonso がカタロニア語はイベリア・ロマンス語であるとしている根拠は、実は R. Menéndez Pidal が *Discurso de contestación a D. F. Codera* においてはじめて明らかにし、後に *Orígenes* でより明確にした X 世紀におけるイベリア半島の言語的統一の概念なのである。この概念を筆者が受け入れられない事は拙論 (注21) で明らかである。

R. Lapesa の説：(注22)

La romanización se efectuó en distintas épocas y condiciones para cada región...la Tarraconense oriental era ruta obligada de legionarios, colonos y mercaderes; es de suponer que acogiera una población florante que se expresaría con descuido, traería novedades de lenguaje y propendería sin duda al neologismo...La Tarraconense comunicaba con Italia y Galia más estrechamente que el resto de la Península, lo que dió lugar a mayor influencia lingüística de la Romania central... No es forzoso que todas estas divergencias aparecieran ya en la época imperial, ni la visigótica, la mayoría debió de surgir en el último período de formación de los romances, cuando Cataluña dependía del estado carolingio.

さて、今まで見て来た通りカタロニア語の帰属の問題は非常に複雑である。実は上に引用した Lapesa はその問題に触れていないのである。又、

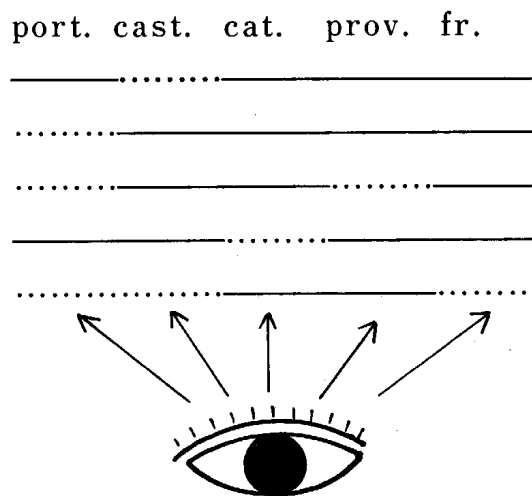
Moll (注23) は,

«La cuestión de si el catalán es ibero-románico o galo-románico tiene un fuerte resabio de bizantinismo»

と言っている程である。実は卒直に言って筆者もある程度同感なのである。「ルーマニア語の起源について」(注24)でルーマニア語の起源の問題を扱った際にも感じた事であるが、この種の問題では、特に当事者が直接関与する場合には、客観的・科学的というよりも主観的・感情的になりやすい傾向があり、領土拡張・経済的文化的優越感・中央政府からの分離思想など実にさまざまな非言語学的要素が入り込むので、はなはだやっかいである。

そして、“起源”ということと“ローマ化・ラテン語化”と同意義であるならば、しばしば今日まで混同されて来たように“今日のロマニアにおける位置”と同じレベルで扱うべきではない。“ラテン語化”の開始の年代はB.C. 218年 Ampurias においてであり明らかにオック語域ともカスティリア語域とも異なる。又、語彙の面を見るとオック語と共通したものの方がカスティリア語と共通したものよりも多い事は事実のようである。しかし、3言語に共通した語彙も当然存在する。そして、音韻・形態的にはカスティリア語は半島内にあっては特異なので、比較する際にはより守旧的なポルトガル語を選んでみると、相当程度の類似性を呈する。

このように見て来ると、次の如き幾分抽象的図式が出来上る。



(N.B. 実線が共通した言語現象を示し、点線が異なる言語現象を表す。)

しかも、このような図式は各々の言語現象に変化があり次第新たなものに書き換えられる可きである。しかし、実際にはそれは不可能なので、例えば中世・近代・現代別でも各世紀別でも実証的に記述することができれば、ある言語例えばカタロニア語のその時々々の姿が他と比較して明らかになるのである。上の幾分抽象的図式は見る角度・位置が異れば各々の言語の示す色彩は異るし、音韻・形態・統辞・語彙と異なる面を別々に見ても各言語の類似性・相異性は異るし、更に全体像にしても当然異って来るのである。

そこで筆者は、決して問題から逃げるわけではないが、“位置”とか“帰属”の問題は、主として借用が最も容易な語彙面のみが考えられて、しかもいろいろな意味で感情論におちいりやすく、純粋な言語学上のテーマにはなり得ないという結論に達した。

更に、“起源”が“ラテン語化”のみならず“今日までの言語形成過程”をも意味するとすればなおさら、二つの問題は別々の問題であり、後者のみが歴史言語学の研究テーマの資格を得るのであるが、それなのに従来しばしば混同されて来たところに、そもそも大きな間違いがひそんでいて気づかれなかったのであると考えられる。

カタロニア語は、当然の事乍ら、カスティリア語ともオック語とも異なる時に異なる様態で生成し、以後互に影響し合う事はあっても、独自の発展をした結果、他の各々のロマンス語がそうであるように、特異な自立した言語であると言える。(1980. 7. 31)

[注]

- 1) Gramàtica històrica catalana, p. 24.
- 2) Colón: El léxico catalán en la Romania, p. 23.
- 3) 拙論 Estudios Hispánicos VI.
- 4) カタロニア語については, Badía Margarit: Gramàtica catalana と La linguistique catalane, プロヴァンス語については, Grandgent: An outline of the phonology and morphology of Old Provençal と, Frank Hamlin 他著: Introduction à l'étude de l'ancien provençal による。
- 5) 性変化の問題は, 同じイベリア・ロマンス語の中でもポルトガル語とスペイン語で異なる例も数多くあり, 理由の解明はむずかしい。
- 6) 動詞の活用一般については別の機会にロマンス諸語の比較を考えているので, 今はこれ以上は深く探らない。
- 7) p. 40, 41.

- 8) RLiR, I, 1925.
- 9) op. cit. p. 42以下.
- 10) ルーマニア語の *vară* と対応している。
- 11) 古カスティリア語の *víspera* と対応する。
- 12) *Diccionario crítico etimológico de la lengua castellana*.
- 13) op. cit. p. 53, 60.
- 14) 言語地理学的にはいかなる方言・地方語も隣接する2言語の *lengua puente* と言えなくはないが、これは言語学的と言うよりも政治的・文化的優位性にかかわる術語だからである。
- 15) p. 146以下.
- 16) p. 153, 154.
- 17) p. 153~157.
- 18) p. 154, 155.
- 19) *La subagrupación románica del catalán*.
- 20) BDC, 1922.
- 21) op. cit.
- 22) *Historia de la lengua eipañola*, p. 73, 74.
- 23) p. 23.
- 24) 大阪外国語大学報XXXVI.

《Bibliografía》

- Amado Alonso: *La subagrupación románica del catalán*, RFE XIII.
- Badía Margarit: *Gramática catalana*, Madrid, 1962.
- Badía Margarit et George Straka: *La linguistique catalane*, Paris, 1973.
- Colón, Germán: *El léxico catalán en la Romania*, Madrid, 1976.
- Corominas, Juan: *Diccionario crítico etimológicos de la lengua castellana*, Madrid, 1954.
- Frank Hamlin, Peter T. Ricketts et John Hathaway:
Introduction à l'étude de l'ancien français, Genève, 1967.
- Grandgent: *An outline of the phonology and morphology of Old Provençal*, New York, 1973.
- Lapesa, Rafael: *Historia de la lengua española*, Madrid, 1965.
- Moll, Francisco de: *Gramática histórica catalana*, Madrid, 1952.
- Rohlf, Gerhard: *Diferenciación léxica de las lenguas románicas*, Madrid, 1960.
- Sanchis Guarner: *Factores históricos de los dialectos catalanes*, Estudios dedicados a R. Menéndez Pidal, Madrid, 1951.

伊藤太吾：いわゆる“proto-ibero-romance”は本当に存在したか。Estudios Hispánicos VI, 大阪, 1980.

伊藤太吾：ルーマニア語の起源について，大阪外国語大学報XXXVI，1976.